

29B-14-55

高知市の調剤薬局利用者に対する大規模災害時の常備薬とお薬手帳に関するアンケート

四国調剤グループ四国調剤よさこい薬局¹⁾、四国調剤グループ²⁾、四国調剤グループ四国調剤はるの薬局³⁾
○香川 佳輝¹⁾、岡村 将平¹⁾、浜田 嘉則²⁾、稲本 悠²⁾、小島 理恵³⁾、氏原 浩善³⁾

【目的】今後30年以内に起こる可能性が高いとされている南海トラフ地震に向けて、高知市では様々な対策や準備を行っている。お薬手帳の携帯や薬の備蓄は災害時医療を円滑にするために有用である。そこで、薬の備蓄やお薬手帳に関する服薬指導の頻度と患者の現状を把握するため、高知市の薬剤師と薬局利用者にアンケートを行った。その結果から問題点と今後の取り組みについて考えた。【方法】同グループの高知市内の薬剤師に、普段の服薬指導でお薬手帳の携帯や薬の備蓄について指導しているか、患者がどの程度お薬手帳や薬を準備していると考えているかについてアンケート調査を行った。次に高知市内の同グループ薬局の薬局利用者に災害時のお薬手帳や薬についての準備状況についてのアンケートを行った。【結果】36名の薬剤師と薬局11店舗の利用者411名から回答を得た。薬の備蓄について、薬剤師で「予備の薬を持つように指導をよくしている・たまにしている」と回答したのは80.6%だった。一方、予備の薬をもつ患者の割合について薬剤師の予想は0-20% (30.6%)、21-40% (36.1%)が多く、指導はしているが実際に備蓄している患者は多くないと考えている結果になった。実際に薬局利用者で予備の薬を持っていると回答したのは65.9%と予想より多かったが、1週間以上薬の予備があると回答した割合は33%だった。次に、薬剤師で「災害時にお薬手帳を持ち出せるよう指導している」は58.3%、「普段からお薬手帳を携帯するよう指導している」は47.2%だった。また患者の現状について薬剤師の予想は、お薬手帳を持ち出せるようにしている人の割合は0-20% (75%)、普段から携帯している人の割合も0-20% (80.6%)が最多で、お薬手帳を携帯している患者は多くないと薬剤師は考えていると判った。実際に患者へのアンケートでは前者が31.8%、後者が20.9%だった。【考察】本研究より多くの薬剤師の予想通り、患者のお薬手帳の携帯や薬の備蓄は不十分であった。指導が行われているにもかかわらず患者の備えが不十分な項目もあり、服薬指導以外の取り組みも必要である。今後は、今回の結果を各薬局に提供しお薬手帳や薬の備蓄に関する指導頻度の増加に努めるだけでなく、ポスターやチラシを用いる、お薬手帳シールを財布に入れてもらう等の工夫をして啓発していく。